

## わたしたちのくらしと住まい

株式会社 アクセプト 垣内 亜佐子

### 《授業実施者》

積水ハウス株式会社 総合住宅研究所  
株式会社 キャリアリンク ワーク事業部

### 《実施した教育機関》

富田林市立向陽台小学校  
富田林市立藤陽中学校

### 《実施した教科・単元》

家庭科・総合的な学習の時間

### 《授業のねらい》

住宅メーカーのリーディングカンパニーである積水ハウス株式会社総合研究所の協力を得て企画した。小学校5～6年生の家庭科の授業及び、中学1年生家庭科の教科書の中にある単元項目を積水ハウス株式会社の企業としての様々な実践事例（安全・快適な住まい・住まいの工夫・環境を考えた住まい）を、わかりやすく具体的に紹介することで住まい・環境というテーマが企業の営みの中で密接に関係していること、そして暮らしに直接結びついていることに気づかせ、子どもたちの産業への積極的な興味を引き出すことができる。

### 《活用される産業界のノウハウ》

- ・ 「住まい」について現場で働く人たちが持っているノウハウや知識を実際の道具や模型などを使って実際に見たり、触ったりする。
- ・ 企業で働く人たちの住まいに対する工夫や努力・研究について、実際に話を聞く。
- ・ 学校の先生とは違う視点で、教科書の項目を網羅しながら、社会と密接に関連付けた授業プランと教材を提供し、産業と社会とのかかわりを子どもたちに実感させる。

### 《実践事例》

#### 【富田林市立向陽台小学校】

#### 第1回 自分と住まい・家族と住まい

世界の家の特徴などを理解し、自分たちの家や生活を振り返り、「くらしの工夫」をグループで話し合った。

#### 第2回 住宅の機能を知ろう！

産業界講師による授業。「安全」「快適」「耐久」をテーマに住まいの機能について体験学習を通してプロから学ぶ。

- 1) パワーポイント教材にて、住宅メーカーが考える「住まい」の重要な視点-「安全」「快適」「耐久」-について知る。
- 2) パワーポイント教材にて住まいの「安全」や「耐久」をクイズを通して学び、気候や風土など、住まいは自分たちの生活に反映していることを知る。
- 3) 住まいの「快適」に関して、「音」「空気」「光」「温度・湿度」の4つの体験コーナーに分かれて、それぞれ「快適」にくらすための工夫や住宅メーカーが行っている工夫を考えた。
- 4) 授業の振り返り



#### 第3回 人にやさしい住まいを考えよう！

産業界講師による授業。

- 1) パワーポイント教材を使用して、バリアフリーとユニバーサルデザインに関して学んだ。
- 2) パワーポイント教材を使用して、家は自然災害などから安全に身を守るために造られているが、実は乳幼児や高齢者は、交通事故よりも家の中での事故で命を落としていることが多いことを知り、なぜ多いのかを体験活動を通して学んだ。
- 3) 「車イス」「高齢者・目、耳」「高齢者・手、足」「妊婦」の4つの体験コーナーに分かれて、現在の自分とは違う体の特徴を持った人の体験をし、ユニバーサルデザインに関して体感する。わかったこと等をワークシートに記入した。
- 4) 体験後、パワーポイント教材を使用して住まいの中のユニバーサルデザインを考えた。



#### 第4回 よりよい住まい方の工夫～環境の視点から～

産業界の講師による授業。

- 1) パワーポイント教材を使用し、鳥・虫・樹に関するクイズをする。
- 2) パワーポイント教材を使用し、自然クイズの解答を行いながら、企業の生態系に関する考え方を知る。
- 3) フィールドワーク&学校の庭木マップ作り。
  - ・グループに分かれフィールドワークを行い、学校の中の木々を調べ、落ち葉等を拾ってくる。
  - ・校内見取り図に、拾ってきた落ち葉を貼り付け、学校の庭木マップを作成する。
  - ・講師と共に各クラスの庭木マップを参照し、学校がいかにか自然豊かかを再発見する。
  - ・パワーポイント教材を使用し、企業の生態系に対する考え方の手本になっている「里山」を知り、再度自然の大切さを知り、自然を守るために個人でできることを考える。



#### 第5回 今までの活動をふりかえろう

これまでの体験学習をとおして「住まい」に関する学習を思いだし活動を整理した。

#### 第6回次に活かそう！

産業界の講師による授業。

- 1) Web アンケートを使用し、アンケート項目にこたえることにより、活動を振り返りながら、自分がこれからの生活の中で実行できることを考える。
- 2) アンケート結果をクラスで共有する。
- 3) Web アンケートのメリットを知り、アンケートという新しい手法を考える。
- 4) 総括



#### 《授業の成果》

やはり児童にとって、体験活動が一番印象に残ったようである。

特に第3次に行われた妊婦体験、車いす体験、手足装具体験、高齢者体験は、今まで全く想像できなかったことを、身を持って体験したことにより、「人にやさしい」とはどういうことか、「暮らしの工夫」とはどういうことかと改めて考えるきっかけになったようであった。

また、第4次に行われた環境の視点から「住まい」を考えた授業も、児童にとって身近な「自然」に着手することにより、印象に残ったようだ。

これらから、今回の授業を通して児童は、自分自身の生活を振り返り、今まで気がつかなかった「住まい」や「家庭での工夫」に興味・関心を持てたことから授業の目的は概ね達成できたといえよう。

しかし、担任や産業界の講師より、授業そのものの価値は非常に高いが、やはり1時間で盛り込んだ内容が多いという意見が多かった。第2次は、住まいに関するさまざまなポイント（「安全」「耐久」「快適」など）を盛り込み、それにプラスして複数の体験活動を行う授業構成であったため、体験活動のところのみに目が注がれ、他のポイントが薄くなってしまった感は否めない。また第3次、第4次も同様に、体験活動（フィールドワーク）に非常に目が行きがちであったため、結果的に児童に学習の「ねらい」が伝わっていないのではないかという懸念もあった。

しかし、児童から、「自分の家でユニバーサルデザインを見つけた」、「困っている人を助けてあげたい」などの声が多く聞かれたことから、児童の住まいに対する興味関心を引き出すことができ、学習の目標は概ね達成できたといえよう。